



Community 4 Children

地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
2023 年度事業報告・決算書
(2023 年 6 月 1 日～2024 年 5 月 31 日)
2024 年度事業計画・予算書
(2024 年 6 月 1 日～2025 年 5 月 31 日)



連絡先：一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町 1 丁目 45 番 1-302 号
電話 06-6622-5645 /Fax 06-6621-7139
E-mail community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

一般社団法人 コミュニティ・4・チルドレン(以下、C4C)は、コロナ禍で開催を見送っていたスタディツアーをタイとカンボジアで、タイでのカンボジア人の有機農業研修などの交流事業を再開しました。長い間オンライン中心のやり取りが続いたこともあり、再会や出会いはこれまで以上に深いものになったと思います。各国の事業も活発化しており、これもひとえに皆様の温かいご支援のおかげと感謝申し上げます。ここに、2023年度(2023年6月～2024年5月)事業報告をいたします。2024年度については、各国で創意工夫した事業を計画しています。2023年度事業報告及び2024年度事業計画に目を通していただきますようよろしくお願いいたします。

今後も、C4C 便りやホームページ、ブログ、郵送等を通じて、現地情報や参加型企画についてお伝えしてまいりますので、関心を持って見ていただきますと共に、ご参加いただければ幸いです。



～ 目 次 ～

・ はじめに	－ i
・ 2023 年度事業報告書	－ 1
1. NGO 支援事業	－ 1
1－1. 海外支援事業	－ 1
A. フィリピン国 JPCoM-CARES 支援事業	－ 1
B. タイ国ノンメック村コミュニティ支援事業	－ 5
C. 海外プロジェクト助成事業	－ 12
1－2. 国内支援事業「宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業」	－ 13
2. 文化交流活動支援事業	－ 17
2－1. スタディツアー	－ 17
3. 視察・研修・ワークショップなど	－ 18
3－1. 研修事業	－ 18
3－2. 国内 IDoCafé 事業	－ 18
4. パートナースhip推進事業	－ 19
5. 情報提供事業	－ 19
6. 組織運営	－ 20
・ 2023 年度 財産目録	－ 21
・ 2023 年度 貸借対照表	－ 21
・ 2023 年度決算報告書（損益計算書）	－ 22
・ 2024 年度事業計画書	－ 24
・ 2024 年度事業予算書	－ 27

2023 年度(2023 年6月～2024 年5月)活動報告

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

フィリピン国 JPCoM-CARES とタイ国ノーンメック村と連携し、運営・活動を支援してきました。またカンボジアの NGO/Khmer Community Development と協働で、ベトナム国境近くの農村の子ども会活動および有機農業推進活動の支援を実施しました。

A. フィリピン JPCoM-CARES(フィリピン共和国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町)支援事業

JPCoM-CARES(ジェイピーコム ケアーズ)は、必要な公共サービスや社会資源が限られた山岳部バギオ市と周辺町村、カバヤン町を拠点に、障がいのある子どもや青年層が地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

1. リハビリテーション&保健プログラム

(1) リハビリテーションセンターSTAC5での理学療法・作業療法・自立生活プログラムの提供

バギオ市にあるリハビリテーションセンター「STAC5(スタック ファイブ): Stimulation & Therapeutic Activity Center 5」では、あらゆるしょうがいを持つ子ども・青年を対象に、一人ひとりに必要な理学療法、作業療法をアセスメントし療育支援を行っています。

作業療法を通して、注意力や集中力などが改善した、自分のニーズや欲求を伝えるための表出方法を習得した、一語から複数単語のフレーズまで言葉で伝えることができるようになった、協調性が出てきて集団遊びに参加できるようになった、運動能力が向上したなど、様々な成長が見られました。理学療法では、スタッフが共有した家庭での運動プログラムを実践する保護者のサポートもあり、体のこわばりの減少、体幹の強化や筋力増加、体の使い方やコントロール力の向上、上肢と下肢の可動域の増加など、様々な改善が見られました。日常生活に必要な生活スキル、社会のルールやマナー、コミュニケーションスキルの習得や向上を目指した自立生活プログラムでは、将来に向けた金銭管理の習得を目指し、各自の貯金箱に貯金を始めました。

◆リハビリテーションセンター利用登録者数とサービス提供数

利用登録者数(人)			サービス提供数(回)
理学療法	作業療法	IL プログラム	
28	42	6	2341

(2) ビタミン剤、医薬品、感染予防・衛生用品セットの提供

子どもたちの成長や健康維持に不可欠な栄養素を補い健康的な暮らしを営めるように、のべ75人の子どもたちにビタミン剤の提供と健康観察を行いました。体重の増加、免疫力の向上、咳や風邪症状からの早期回復が見られています。ビタミン剤を提供することで、ミルク・薬・おむつ・療育費・学費など子どもの他のニーズに費用を充てられるようになったといった保護者からの声も届いています。衛生用品は、地域の個人や企業からも寄付をいただき、のべ198人の子どもたちに、手指消毒用アルコール、歯磨きセット、フェイスマスクなどのセットを提供しました。

(3)医療サービスや医療機関の紹介・照会

リハビリテーションセンターSTAC5で適切な療育を実施するため、また支援の効果や変化を見るため、37人の子どもたちを連携する専門医・医療機関と繋ぎ発達評価をしていただきました。結果、療育サービスの継続が推奨されました。6人の子どもたちが、立つ・座る動作をサポートする補助具の利用を勧められ、購入が難しい家庭には、社会福祉開発局が実施する支援プログラムに繋ぎ、購入することができました。

(4)保健プログラム

子どもたちや家族の健康の維持・向上、病気の早期発見を目的に、専門医や自治体など様々な個人やチームに協力をいただき、歯科・耳鼻咽喉科・眼科検診の保健フェアを実施しました。



実施日	地域	参加人数	パートナー団体
11月10日	バギオ市	子ども・保護者・家族 86人	・開業歯科医 ・バギオ市総合病院耳鼻咽喉科医療チーム ・マッサージセラピストチーム
1月27日	カバヤン町	子ども・保護者・家族 18人	・カバヤン町自治体 ・コルディリエラ消防局 ・Taraki TV

(5)セミナー&研修

保護者や家族が、病気やしょうがいへの理解を深め、子どもたちのニーズに対応できる技能や技術を得ることを目的に、以下のセミナーや研修を実施しました。

実施日	地域	参加人数	内容
7月18日	バギオ市	保護者7人	<u>しょうがいの早期発見・予防・介入セミナー</u> 新規利用者の保護者を対象に、しょうがいの早期発見・予防・介入の重要性、特性について情報共有を行いました。
2月27日	バギオ市	保護者14人	
7月19日	バギオ市	保護者10人	<u>理学療法のスキルアップ研修 ～セラピートレーニング&マネージメントテクニック</u> 2日間にわたり、各家庭で実施できる理学療法技術のトレーニングを行いました。
7月20日	バギオ市	保護者5人	

2.教育支援

(1)奨学金の支給

バギオ市10人、カバヤン町14人の子どもに奨学金を支給し、学費や通学費、教材費、寮費などに使われました。定期的に奨学生や保護者とミーティングを行い、勉強や学校生活など直面している問題や懸念事項のヒアリングと対応策の共有を行いました。学校年度末の4・5月には、バギオ市と周辺地域の8つの学校を訪問し、先生方と情報共有を行いました。

(2)学用品の支給

子どもたちの継続した学びをサポートすること、保護者の経済的な負担を軽減することを目的に、バギオ市33人、カバヤン町14人の就学中の子どもたちに学用品の支給を行いました。

(3)サバイバル&ライフスキルトレーニング

自立生活プログラムに参加する子ども・青年層を対象にグループ研修を実施し、仲間とともに調理や家事実習に取り組みました。メンバーに励ましの声掛けを行ったり、メンバーからのサポートを受けてグループでの役割を全うできたりと、リーダーシップや協調性が育まれている様子が見られました。

実施日	地域	参加人数
8月22日～25日	バギオ市	13人
11月12日	カバヤン町	14人
5月11日	カバヤン町	14人



3. 保護者のエンパワメント

(1)ワークショップ・研修・行事

保護者が集い悩みや気持ちを聞き合うシェアリングの場づくりを行い、学校生活における行動問題の対応方法や子どもの成長について話し合いを行いました。保護者同士が交流や絆を深める時間となり、他の保護者の経験を聞き、学ぶことができたと話す若い母親もいました。

実施月	地域	参加人数	内容
9月	バギオ市	5人	各保護者との個別のケース会議
11月		2人	
7月		10人	保護者の分かち合いの会 (グループシェアリング)
3月		10人	
5月		12人	

(2)保護者会支援&ネットワークづくり

保護者同士が、相互にサポートしながら共通の問題をともに解決し、ネットワークを育みグループを強化していくことを目的に、保護者会の活動をサポートしました。

地域	回数	内容
バギオ市	3回	年末年始やクリスマス、夏休み期間中の子どもたちの活動について、企画・実施を行いました。
カバヤン町	5回	新たな保護者会の立ち上げに向けて、役員の決定や会則の作成、保護者会の目的や今後の活動計画などについて話し合いを重ねました。

4. 権利擁護・コミュニティ啓発活動

しょうがいに対する地域社会の認識を高め、しょうがい児・者が直面する問題や課題に地域関係者が対処できることを目的に、「障がいの早期発見・予防・介入セミナー」を実施し、社会福祉を学ぶ学生や自治体関係者435人が参加しました。特に、コーディリエラ・キャリア開発カレッジでは、社会福祉学科の学生によってセミナーが企画され、しょうがいに対する考えが変化した、理解が深まったといった感想が聞かれました。若い母親や子どもに接する機会が多い地域の保健員からは、しょうがいを持つ子どもの早期発見・予防に関する重要な視点を得ることができた、といった声が聞かれました。



実施日	地域	参加人数
2月23日	コーディリエラ・キャリア開発カレッジ (ラ・トリニダッド町)	97人 (社会福祉学科学生、社会福祉学科教諭)
3月14日	ハッピーハロー村 (バギオ市)	28人 (自治体役員、保護者、介護士、高齢者)
3月22日	コーディリエラ・キャリア開発カレッジ (ラ・トリニダッド町)	292人 (社会福祉、看護、犯罪社会学の学生、大学教員、地域の保健員、市保健サービス事務所職員)
4月18日	Beckel 村 (ラ・トリニダッド町)	18人 (自治体役員、母親&女性グループ)

5. ネットワークづくり・社会資源の活用

(1) ネットワークづくり

子どもたちや保護者、地域パートナーや各関係者・機関とのネットワーク構築のため、下記の行事を実施しました。中には、奨学生たちがプログラムの進行を担った活動もあり、スタッフやOJT学生のサポートを受けて、積極的に取り組んでいました。また、子どもレクリエーション・デーでは、地域の高校生や大学生がプログラムを企画・準備し、相互に交流を楽しんでいる様子が見られました。



実施日	地域	人数	内容
11月10日	バギオ市	28人	第26回 STAC5周年記念行事・子ども月間交流会
12月9日	バギオ市	20人	ギフト・プレゼントの集い
12月2日	カバヤン町	26人	年末の集いとクリスマス・ギフトの贈呈
12月19日	バギオ市	61人	
1月19日	ラ・トリニダッド町	38人	エコセラピー 森林ウォーキング、ハイキング、ピクニック
2月26日	バギオ市	48人	子どもレクリエーション・デー
3月20日	バギオ市	36人	温水療法
4月21日	バギオ市	26人	子どもレクリエーション・デー
5月17日	バギオ市	33人	母と子どものレクリエーション・デー

(2)社会資源の活用・コーディネート

自治体やコーディネリア行政区の社会福祉開発局がリハビリテーションや医療が必要な子どもを対象に行っている、経済支援や貧困家庭への財政支援の申請を行い、14人が補助金3,000～7,000ペソを受け取りました。療育費や治療費、薬代、ミルクやオムツなどの生活用品などのニーズに使われました。

【成果と課題】

2023 年度も、バギオ市のリハビリテーションセンターSTAC5 をベースとした療育支援や各活動の実施、カバヤン町をはじめとする地域へアウトリーチした活動を進めてきました。バギオ市・カバヤン町ともに、新しい保護者の参加が増えており、活動への理解や保護者とのパートナーシップづくりを丁寧に行ってきました。より一層の保護者の参加を促進するため、次年度も引き続き保護者のニーズや声を聞きとりながら、場の持ち方や活動の方法などを工夫し、保護者との連携を強化していきたいと考えています。特に、カバヤン町は、新しく奨学生となった子どもの保護者が加わり、保護者会の再編成が始まったばかりです。保護者会の基盤づくりと子どもたちが笑顔で育つことができる地域づくりに向けた活動をサポートしていきたいと考えています。

B.タイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業

これまでコンケン県ノーンメック村において、子どもを見守ることができるコミュニティ作りを応援する様々な事業を展開してきました。大人たちが自分たちのコミュニティの中で絆を強化し、農民としての生き方に自信を持ち、経済的にも自立できるようになることが、子どもたちを健全に育てる基盤となります。そのため事業は、有機農業普及と伝統文化の復興を柱に自然と共存しながら収入の向上を図ろうとしてきました。

その後コロナ禍を経て、様々な活動を主に実験農場で行うようになりました。実験農場は、『結』の伝統を継承させ、農業に関する学習の場を提供するだけでなく、2022 年 5 月からコミュニティ・マーケットの場としても開放されるようになりました。これまで有機農業普及や植林活動などを通じて、身近な自然資源を有効利用しようと重ねてきた努力が、市場開発という方向に集約され、環境に優しい経済、安全な食というキーワードで結ばれた緩やかなネットワークを地域外に広げ始めました。また 2023 年度は出稼ぎ後 U ターンして村で再び生活基盤を求めようとする若者を応援することを念頭に活動を行いました。次世代にこれまでの活動を伝え、新たな活動へとつなげるために、青少年の育成事業は欠かすことができません。



1. 有機農業の普及

◆子どもとコミュニティのための有機農業実験農場での稲作

@アレンヤー実験農場(村人から無償で農地を借りています)

参加者:ノーンメック村と周辺村の大人、青年、子ども、僧侶

無償労働交換である『結』で田植えと稲刈りを行うことは、コミュニティの団結を強め、自分たちのルーツや文化を忘れないためにも重要です。『結』を復活させて8年目を迎えました。8 月にはノーンメック村住民および周辺村落やコミュニティ・マーケットで出会った他県の有機農家が参加しただけでなく、コロナ禍によって3年間途絶えたのちに再開したスタディツアーに参加した日本人やカンボジア人農民も一緒に田植えをすることができました。米の収量も、もち米とうるち米を合わせて肥料袋30袋(もみ付き米で約1,200kg)を得ました。

土地改良のために、緑肥(マメ科植物であるサンヘンブ)と堆肥・液肥を継続して投入しています。確実に土地の質を確実に向上させているようです。またこのようなマメ科の植物を稲作後に植えることによって、雑草除け

にもなり、土が水分を含むようになります。他の農民の土地と比べて、雑草もそれほど多くなく、稲もきれいに育ち、稲刈りにも多くの村人が集まってくれました。

実験農場では、原生種の保全を進めており、収穫した米は寺院を通じて必要とする人に配ると同時に、有機・自然農法に関心があって植えようとする人にも無料配布しています。

日時	参加者・人数	活動
6月11, 12, 13, 23日 7月6日 8月4, 5日	ノーンメック村住民とスタッフ4人 4人 7-15人	田植えの準備; 雑草刈り、水入れ、苗床作り 田植え用に苗準備
8月6日	ノーンメック村および周辺村住民、日本人ツアー参加者、カンボジア人農民総勢約60人	『結』田植え
8月13, 31日 9月3, 5, 7, 8, 15, 18, 25, 26, 27日 9月29日	4人 4人	田んぼの状態確認 田んぼの水の調整、堆肥投入、除草
10月3, 8, 17, 20, 23, 24, 26, 27, 30日	4人	雑草抜き、田んぼの状態確認
11月2, 3, 4, 7, 14日	5人	稲刈り準備、稲刈り(うるち米)
11月20日	ノーンメック村および周辺村住民、他県のネットワーク・グループ25人(うち青年4人)	『結』稲刈り(もち米)
11月23, 24日	6人	稲の運搬、脱穀、米蔵へ入れる
12月7日	4人	緑肥(サンヘンブ・マメ科植物)播植

◆自立のための農業普及活動

新型コロナウイルスの影響で、対面で集まることが困難になった時期に、有機農業を続けよう、またはこれから始めようとする人を励まし、情報や知識を共有するために始めました。月に2〜3回、10軒程度の農家を訪問し、収入向上を目指して、現場で技術指導、相談、種苗の配布・分配などをスタッフや参加した農民たちが行いました。一方的な指導ではなく、関心のある人も参加でき、持ち回り式の交流の場となっています。特に、最近では月例マーケットで売ることを念頭に、商品化・加工方法を学びながら、作付けを調整するヒントやアイデアを情報交換によって得ています。それぞれが他者の実践からヒントを得て、自分の農地で試みた結果、木がなかった田んぼに数年後、植樹により木が大きく育ち森となり、果実や薬草などをもたらすようになった例もあります。

コロナ禍でバンコクでの仕事がなくなり帰村し、現在有機農業を学びながら村で生活基盤を築こうとしている青年(43歳)に聞くと次のように話してくれました。

「バンコクで何十年も工場などで働いていた。海外で働いたこともある。コロナで帰村した時、父母はまだ農業をやっていたので、実家で農業を始めることにした。まずは観賞用植物を作り、家の前やオンラインで売りだした。そんな時、月例マーケットの存在を知り、アレンヤー農場でも売り始めた。有機農業も学び始め、これまでの

自分の経験や人間関係を利用しながら自分の土地で何ができるかを模索している。収入は減ったが、両親とともに生活し、自分の好きなことができる。もうバンコクには戻らない。ここは競争社会のストレスとは無縁で、お互いに助け合うことができる関係の中で暮らしていきたい。」

また新しい試みとして、アレンヤー実験農場の一部を青年 5 人に協同で貸しています。農民同士の交流活動の中で出会った彼らは月下香(チューペローズ)を植えて、収入源にしようとしています。将来、月例マーケットの運営やコミュニティ活動を継承してくれることを期待してのことです。

2. コミュニティ文化の継承

◆寺院やコミュニティでの行事参加@ノーンメック村寺院、ノーンメック村内、アレンヤー実験農場

ノーンメック村で実施された結婚式、得度式、葬式、追善供養、雨安居の仏日などに、コミュニティの一員としてスタッフも参加しました。12 月 27 日に寺院で行われた仏教儀礼には、実験農場で収穫したもみ付き米を肥料袋 2 袋寄進し、米を必要とする人々約 25 人に配布しました。

1 月 14 日には、子どもの日の祝いを実験農場で行い、ノーンメック村だけでなく周辺村からも 47 人の子どもたちが参加しました。また当日は月例マーケットの日でもあったため、売り手や購買客も一緒に参加しました。今回は、青年たち(20 代後半)5 人が子どもたちを遊びや音楽に導き楽しく過ごすことができました。参加した子どもたちが予想よりも多かったため、プレゼントが全員に行き渡らず、すぐに眠くなってしまった小さな子どもの世話に追われるきょうだいもいました。また月例マーケット終了後、売り手のメンバーたちと新年会を行い、親睦を深めました。



4 月 20 日は、少し遅めのタイ正月(ソクラーン)の祝いを実験農場で行いました。村の高齢者(60 歳以上)28 人(男 6:女 22)、20~50 代 22 人、10 歳以下の幼児 6 人が参加し、年下の者たちが高齢者の長寿を祈って水をかける儀礼を行いました。商業化し派手になった水かけ祭りですが、本来はこのように長老に感謝し、長寿を祈るために行うものでした。

◆コミュニティ青年ボランティア(旧・子どもの居場所づくり)

コロナ禍前までは、ノーンメック村の村人の家の一部を放課後や週末開放して、自由に子どもたちが過ごすことができる場所としていました。しかしコロナ禍のため、一旦活動は中止していました。その後も青年ボランティアの都合がつかせませんでした。その間、活動拠点が村内よりもアレンヤー実験農場の方に移動し、月例マーケットも 2 年目に入って軌道に乗り始めたことも相まって、子どもたちとの活動を月例マーケットの日にマーケットを開催する農場で再開することにしました。売り手たちの中には子どもや孫の世話をしなければならない女性たちも多く、安心できるボランティアに子どもを預けて、マーケットで物を売ったり、研修に参加したりすることができます。



これまで青年ボランティアも一人だけでしたが、少しずつ増えて 3 人ほどが手伝ってくれるようになりました。毎回 5~16 人の子どもたちが参加し、年齢は、未就学年齢から小学生までで、兄弟が弟妹を連れて参加する場合もありました。

活動内容は、簡単な英会話、お絵かき、GPS の使い方、お菓子作り、農場の植物観察、マーケット観察など、子どもたちが知りたい、やりたいことを優先させて毎回活動内容を決めます。自由な発想で積極的な質問をボランティアにする子どもたちは、型にはまらない学びを楽しんでいます。近い将来、彼らがコミュニティ・マーケットなどの活動を引き継いでくれることを期待して、自主的な学びができるようにこれからも応援します。

3. 森林保護・保全、有効利用活動

森を愛する心を育て、自然資源を適切に利用するため、将来も森林を利用できるように、ノーンメック村公共地で植林を行ってきました。しかしこれまでの努力の結果、これ以上植林する場所がなくなり、2023年度は定期的にスタッフや住民が見回りを行うにとどめました。その代わり、苗木を育て希望する人々に配布し、個々人の農地で森を育てることを勧めてきました。このような「家庭林」は、人によっては農地の 6 割を占めるようになり、森の恵みを与えています。

◆水利管理研修

日時:5 月 19 日 @アレンヤー実験農場 参加者 15 人(村人、関心のある一般の人々)

2023 年度の乾季は、普段より気温が高く、地下水も干上がり、人々は農業用水や飲み水の不足に困りました。しかし実験農場では、さほど土地が干上がることもなく土地は適度な湿りを維持していました。それは 2 年前に「地下水銀行 Groundwater Bank」システムを導入したためではないかと話し合われました。

地下水銀行システムとは、砂漠など水がない地域で地下水を最大限利用できるように考えられた簡易な方法で、約 20 年前タイ人僧侶がアメリカで見かけて、その知識を持ち帰りタイでも応用を試みて、人々に知られるようになりました。特に干ばつと洪水を繰り返す東北地方では、口伝で徐々に広まってきました。プラスチックや小石だけででき、様々な場所で応用できることを、隣県からインストラクターを呼んで実際に見て、実践して学びました。



◆森の有効利用研修

日時:3 月 21 日 @アレンヤー実験農場「落ち葉から作る堆肥・液肥」参加者 13 人(女 8:男 4)

4 月 18 日 @アレンヤー実験農場「落ち葉から作る堆肥」参加者 13 人(女 7:男 6)うち青年 3 人

4 月 18, 19 日 @アレンヤー実験農場「しいたけ作り」「砂糖ヤシのお菓子作り」

を月例マーケットの中で実施しました。

4. 健康向上プロジェクト

2 月 26 日 @アレンヤー実験農場

参加者:ノーンメック村と隣村の住民 15 人

病を知り、身近なもので自分や家族を癒すために、病気や治療法、特にタイ方医学の知識を学び、実生活に应用できるように 2021 年度から安全な食や生活習慣に気を付けて健康を増進させる研修を始めました。

タイ方医であるレックさんとスタッフから、身近にある薬草の知識とハーブオイル、ハーブ・シャンプーの作り方を学びました。参加者には高齢者が多く、彼らの関心が高い病気の知識、予防方法、毎日の健康的な食事のと

り方などに焦点を当てました。周りの自然資源を自分自身の健康のために有効利用し、病気を予防することができるよう、ハーブオイルのようなマーケットでも売れるような商品を開発していくことを話し合いました。そのような商品を見て、消費者も化学物質を使う機会を減らすことができるかもしれません。

問題点として、地元には薬草類が少ないことがあげられます。アレンヤー実験農場ではレックさんが植えていますが、それ以外の土地にはあまり植える人がいません。今後、自分の土地にも植える活動を増やしていく予定です。

5. コミュニティ・マーケット

これまでノーンメック村とその周辺村において、有機農業の生産技術や知識の向上を目指して活動してきた結果、自分たちの生産物を売るマーケットが必要であると考えようになり、2022 年 5 月より村人たちの手でコミュニティ・マーケットを始めました。有機農業の生産をコミュニティ・ビジネスにつないでいくためには、必要なことです。そして 2023 年度末、無事、マーケット開催 2 周年を祝うことができました。

コミュニティ・マーケットは以下のような目的を持って開催しています。

①有機農業の生産、生産物の加工、市場の設営、運営、販売方法などを実践的に学ぶ

②市場での販売に合わせた材料や加工品を用意することで農業経営の力をつける

③有機農業で作る安全な食の供給を通じて、消費者と生産者をつなぐ

④人々の健康のためによく、収入を生み出す

コミュニティ・マーケットは、基本的に月に一度第3土・日曜に、アレンヤー実験農場の土地の一部を無償で借りて開催しています。金曜日に設営し、市場を閉めた日曜日には参加者全員で片付け、ゴミを持って帰ります。帰る前には必ず振り返りを行い、次の開催について話し合っています。

売り手は、ノーンメック村と周辺村、および他県のネットワークからも参加し、毎回約 20 人前後が自分たちの生産・加工物を売っています。知り合いが知り合いを呼ぶ形で広がり、有機農業による安全な食材や加工品、自然で健康によいものであれば何でも売ることができますが、中間業者や仲買いは受け入れていません。

顧客は、実験農場の近くに住む人、参加者の知り合い、ネットや SNS を見た人、通りすがりで看板を見て立ち寄った人などでした。開催して 2 年にもなると常連客もできました。



売り物は、季節に応じた生の野菜、果物、お菓子(揚げバナナ、もち米菓子、ドーナツ、サトウキビジュースなど)、薬草とタイ方医薬、ハーブボール、草木染 T シャツ、苗木、堆肥など多様なものです。類似した売り物を持ってきた場合、同じブースで販売したり、重複しないように前もって調整したり、競合することなく売り手たちが話し合いで売り方を決めました。他の用事で参加できない場合、商品などを他の売り手に託して売り、また売れ残りのないよう交換や配布も行われました。

コミュニティ・マーケットでは、販売だけではなく、ワークショップやイベントも同時に開催しています。売り手の誰かが自分の商品の作り方を伝授したり、子どもの日に合わせて子ども向けのイベントを開催したり、音楽を演奏したり、有



機農業に関わる経験の共有を行う場を設けて、売り手も買い手も含めた参加者が誰でも学びながら楽しめる場づくりを心掛けています。

つまりコミュニティ・マーケットは、以下のようにいろいろな人にとって、多様な意味を持つ場となっています。

- ①人と人、村と村をつなぐ場
- ②どんな年齢の人でも参加し、いろいろな形の知識を得ることが出来る場
- ③売り手と買い手の壁を越えて仲良くなれる場
- ④健康を守る場
- ⑤地元文化を継承する場
- ⑥若者たちが自分たちでやろうと決めたことをできる場
- ⑦新しいものと古いものをつなぐ場

◆コミュニティ・マーケットで行ったワークショップ/総売り上げ*

マーケット開催日	ワークショップ内容/研修	総売り上げ(パーツ)
6月17、18日	—	15,955
7月22、23日	伝統的な米クラッカー作り	17,970
8月19、20日	植物を使った加工品作り(観賞用植物など)	20,730
9月16、17日	—(音楽演奏)	16,359
10月21、22日	—(音楽演奏)	15,800
11月18、19日	—(音楽演奏)	12,250
12月9、10日	移動マーケット@コンケン県ムアン郡バーンコー行政区ノーンルアン村の田んぼバーン・ナー198	48,715
1月7、8、9、10日	マーケットの整備・整地など	
1月13、14日	—子どものためのイベント(14日は子どもの日)	12,300
2月17、18日	植物を使った加工品作り(観賞用植物など)	14,210
3月16、17日	落ち葉で作る堆肥・液肥	13,150
4月20、21日	—長老への水かけ儀礼(ソングラーン)	16,710
5月18、19日	—マーケット開催2周年記念行事 日本のお菓子作り、しいたけ作り、地下水銀行研修、砂糖ヤシを使ったお菓子作り	21,730

*複数の人が売り手に商品を預けたり、物々交換などもあるため、個々人の売り上げを確定するのは難しい。そのため参加した売り手各人が申告する売り上げ額をまとめた。

**12月15、16、17日には、パトゥムタニー県にある王立農業博物館のイベントに参加し、月例マーケットの活動を紹介した。

2023年12月には、初めての試みとして「移動マーケット(旅する市場)」を、これまでのアレンヤー実験農場とは異なる場所で開催しました。コンケンの町に近いところに住む知り合い(マーケットの顧客)が稲刈り後の農地を貸してくれました。設営したステージの上で音楽も演奏しました。町や大学に近いことから、健康や安全な食に関心のある多くの人が集まってくれました。

またバンコク近郊にある王立農業博物館に青年たちと行き、出展して物を売ると同時にコミュニティ・マーケットの話をしました。今までとは異なるタイプの人々に販売することを通じて、新しい経験を多く得ることができました。

コミュニティ・マーケットが目指しているのは、売り手と買い手が交流し、楽しみながら新たな関係のネットワークを築くことです。お互いを助け合う家族や親せきのような関係になるような場を提供するために、参加者が、毎回話し合いを重ねています。商品も多様化してきました。新しい動きとしては、都市で働いた後帰村し、地元で仕事を創出しようとしている青年たちが参加し、活動を担い始めたことです。これからも持続性のあるマーケットの構築のためにも、若者たちの参加を促していく予定です。

6. 牛銀行プロジェクト

2013 年から青少年の就労支援基金の設立を目指して始めた牛銀行プロジェクトも 10 年目を迎えました。牛銀行委員会の委員たちは、牛の管理に責任を持ち、地域の共同資産として大切に育て、地域福祉を支援する事業として続けています。出た利益は、相談の上、村の子どもたちへの奨学金にします。しかし近年、牛の感染症(ランピースキン)の流行、種付け・妊娠の困難化、牛の価格の下落などの問題に直面しています。そのため共同の牛を育てる責任感を持つ飼育者を見つけることが困難になってきました。そのため 3 頭の母牛を売り、手にした代金を一旦牛銀行委員会の会計に保留することにしました。2 人だった飼育者は、現在一人になり、3 頭の母牛と 3 頭の子牛を飼育しています。今後は、牛マーケットの動向と牛の状態を見ながら、牛銀行委員会で相談の上、対処していく予定です。



【成果と課題】

2023年度は、それまで以上にアレンヤー実験農場を拠点とした活動を増やしました。特に、月一回のコミュニティ・マーケット開催は 2 周年を迎えることができました。コミュニティ・マーケットは有機農業生産物の販路確保であるだけでなく、学びや交流の場も提供します。村落を越えるコミュニティの人々との出会いから、村人も様々な経験や知識を共有し、ネットワークを広げてきました。また開催場所もアレンヤー実験農場だけでなく、他の農場でも開催する「移動マーケット(旅する市場)」を年に 1 回始めました。

これまで支援してきた有機農業、堆肥づくり、製品加工などの事業は、すべてこのコミュニティ・マーケットに集約し、マーケットの場を中心にほとんどすべての活動を行うようになりました。それだけでなく、子どもの居場所づくり事業をマーケットの場を借りて、子どもたちの学びの場にしていくことにしました。それによってマーケットは、小さな子どもからお年寄りまで、誰でも安心して参加でき、様々なことを学び、いろいろな人と交流できる場となりました。

今後の課題は、これまでの活動の持続性です。そのために青少年ボランティアやスタッフの育成に力を入れ始めました。今後は、都市での生活も知り、自主的に U ターン帰村した青年たちが地元で暮らしていけるように、支援の方向性を修正していく予定です。

C.海外プロジェクト助成事業

カンボジアの NGO である Khmer Community Development(以下、KCD)を通じて、ベトナム国境沿いの村々の子ども会活動(ピース・クラブ)と有機農業推進事業を支援しています。

事業対象地であるプレックチュレイ村とその周辺村は、ベトナム国境と川で接しています。コロナ禍の国境閉鎖を経て、それまでベトナム側に市場、医療、教育に頼っていた人々が、カンボジア国内、特に首都プノンペンとのつながりを強めました。カンボジア国内の国道整備が急速に行われ、交通の便がよくなったことから就職、就学、市場をカンボジア国内に求めることが多くなりました。これまでベトナム側の学校に通っていたベトナム系の子どもたちもカンボジア側の学校に行くことが多くなり、クメール語を学び、学校でもクメール語を少しずつ話すようになりました。



◆子ども会(ピース・クラブ)活動

活動の目的は、自分たちのコミュニティの課題を探し、自分たちで解決策を話し合い、アクションにつなぐことです。環境問題解決のための村内外のゴミ拾い、不登校児童の家庭訪問などの他に、小さな子どもたちへ学習サポートをする「小さな先生(青空教室)」活動も続けており、先輩たちがクメール語や簡単な算数を教えています。すべての活動はメンバーである子どもたちが発案し、決定したものです。現地の NGO スタッフは、教えたり指導したりすることなく、一緒に並走することで子どもたちの成長を見守っています。

◆有機農業推進事業

コロナ禍で途絶えていたカンボジア人農民のタイでの有機農業研修交流を再開しました。カンボジア人たちは、帰国後、自分たちのコミュニティの中でもタイでの有機農業研修の経験を伝え、またタイで学んだ草木染技術を家族や村の子どもたちに教えています。コロナ禍の影響や道路などインフラの整備もあって、一度有機農業を始めた農民も出稼ぎに行ってしまったたり、市場で価格の差異化がなされないために手軽な化学肥料を使う農法に戻ったりと、なかなか有機農業を実践する人の数は増えていません。それでも食の安全性に不安を感じる人は増えており、今後青少年に対する環境教育と連携して、有機農業の推進を検討しています。

◆環境教育事業(草木染研修)

大阪コミュニティ財団の『がっこう基金』から助成を受けて、草木染を通じた環境教育事業を実施しました。環境に関わる課題の中で、特にプラスチックごみの問題はとても深刻です。そこで環境の重要性を学ぶ一つの方法として、草木染を取り入れ、子どもの頃から環境問題に気づいてもらおうと子ども会を中心に研修を実施しました。身近な植物でTシャツを染めることができることを知り、子どもたちは驚きながらも楽しんでいました。



その他、小学校の校庭に菜園を作り、無農薬で野菜を育てる「スクール・ガーデン」事業も進めています。安全な食と健康について教師とともに実践的に学びます。子どもたちは楽しく得た知識や経験を家に帰っても、家族に伝えようとします。そこから少しずつ有機農業などの実践が広がっています。

◆子ども会のネットワーク支援

子どもの権利向上に向けた青年運動(Young People Movement for Child Rights ; 略称 CCYMCR)というネットワーク組織と共同で、スタッフや子ども会リーダーの能力を向上させるための研修ガイドラインを作成しようとしています。これまで KCD は多くの村で子ども会をゼロから立ち上げる支援を行い、その経験も豊富なことから、そのノウハウを全国ネットワークにも広く伝えていくためです。ネットワークに参加しているのは、KCD の活動地域であるプレックチュレイ地区の子ども会を含め、国内 11 県/自治体に渡る 12 団体です。子どもたちにとって、異なる地域で同年齢の仲間がどのような活動をしているのかを知ることは、とても刺激になります。様々な知識や経験を得て、自分のコミュニティでの活動においても応用することができます。今後も CCYMCR と協働して、研修ガイドライン作成以外にも他の地域の子ども会同士の交流を促進していきます。

【成果と課題】

2023 年度は、タイとカンボジアの有機農業研修を通じた交流事業を再開することができました。そしてタイで得た草木染知識をカンボジア農村の子どもたちにまで伝えることができました。子ども会もコロナ禍を経て、メンバーの顔触れも一新しましたが、活動は活発化してきました。しかし同時に高校や大学などの進学率が上がったため、小さな子どもたちに勉強を教える「小さな先生(青空教室)」の活動は、村によっては教えるボランティアのなり手が少なくなりました。地域によって活動に斑がある状態です。

有機農業の担い手の数も、増えるどころか減っている地域もあるようです。その原因は、市場が開拓できないためです。手間暇かけても他の単一換金作物と同じ値段にしか売れません。そこで農産物をそのまま売るのでなく、加工・商品化して付加価値を付けてから売るための研修を始めました。またこれからは、子どもの頃から安全な農業、食、環境に関する知識や実践に触れる機会を増やし、環境に優しい農民を育てることに重点を置くことが重要であると考え、草木染やスクール・ガーデンなどの活動をより一層進めていきます。その拠点となる子ども会活動は、引き続きメンバーの発案や夢を大切にしながら、自主的なコミュニティのための活動を継続できるようにスタッフたちが見守っていきます。

1-2. 国内支援事業「宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、実施を検討・計画されている地元の社会福祉協議会・NPO・学校等と連携・協働し、次のようなことに取り組みました。

特に今年度においてはコロナ禍の影響が落ち着いてきたため、県内外のこれまでの関係先を巡回し、改めて、現在の東日本大震災からの復興の状況や地域づくり活動の状況を把握し、地域の福祉力防災力を高めるために求められる取り組みや姿勢についてヒアリングを行いました。

また東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの普及・啓発活動、防災レシピカレンダー製作を通じた担い手育成、県内を中心とした福祉・防災学習実践支援などを通して、東日本大震災から 10 年以上が経過した宮城における東日本大震災の教訓の伝承や、福祉・防災学習推進の担い手育成に引き続き取り組みました。

1. 福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業

● 東日本大震災の経験を教訓としてつないでいく防災ゲームの普及・啓発活動

東日本大震災の風化が進む中、震災発生直後から県内各地でおこった助け合い活動を今後教訓としてつなげていくことを目的に作成した「みやぎ発防災ゲーム」の普及・啓発活動に取り組んでいます。

2023 年度は全国各地からご注文をいただいたほか、宮城県内では色麻町・女川町、県外では青森県藤崎町・平内町、沖縄県那覇市、大阪府大東市で、児童・親子・地域住民・福祉施設職員等を対象とした、宮城発防災ゲームを活用した防災講座の講師対応を行いました。福島県会津若松市内では県内社会福祉協議会職員を対象、愛媛県今治市社会福祉協議会では職員を対象とした体験会を実施しました。

また、ゲームをご購入いただいた団体から、「他の職員や協力者にも、ゲームの実践のポイントを伝えるための参考資料はないか」との問い合わせを複数いただいたため、ゲームの実施のポイントや実践者の声などをまとめた動画を作成し、Youtube 動画および DVD で配布を行いました。



2. 福祉・防災学習担い手育成事業

● 防災レシピカレンダーの製作を通じた若者世代への教訓の伝承、地域連携

昨年度に続いて、宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!(FAS)と東六郷・東部かあちゃん'ずの協力を得て、誰にでも必要な「食」という切り口から防災が日常に溶け込み取り組んでいただきやすくなれば・若い世代が東日本大震災の教訓を学ぶきっかけになればという思いから、防災レシピカレンダー2024の製作に取り組みました。

FAS の皆さんに考案いただいた防災レシピを東六郷・東部かあちゃん'ずの皆さんに試食していただきレシピの改良を重ね、カレンダー掲載写真撮影の際は FAS 卒業生のフードコーディネーターに協力をいただき、様々な方と力を合わせて作成に臨むことができました。

全国各地から関心を寄せていただき、完成したカレンダー500 冊はほぼ完売となりました。

カレンダー掲載レシピを調理する防災クッキング教室の視察に伺いカレンダーや掲載レシピへの評判を伺ったほか、FAS を講師にお迎えし、2023 年版カレンダー掲載レシピのオンライン防災クッキング教室を2023/8/20にHumanBeing 主催で、2024 年版カレンダー掲載レシピの防災クッキング教室を2023/11/25にC4C 主催 I Do Café(HumanBeing 共催)で行いました。



3. 福祉・防災学習実践支援事業

県内で実施される福祉・防災学習事業について、実践支援に取り組みました。

・2023/7/25 夏休み福祉体験(色麻町社会福祉協議会)

みやぎ発防災ゲーム「これ持ってぐ〜！」を用いた防災教室

・2023/9/26 防災教室(女川町立女川小学校)

みやぎ発防災ゲーム「これ持ってぐ〜！」を用いた防災教室

- ・2024/5/31 防災勉強会(宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!)
- 防災とは・災害への備蓄・食の防災について等

4. 福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築事業

県内外で開催された研修会・学会委員会大会等への参加を通じ、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

- ・2023/6/8 日本福祉教育・ボランティア学習学会ネットワーク委員会(オンライン)
- ・2023/6/12 第80回防災カフェ(滋賀県庁・オンライン)
- ・2023/6/17 防災意識が変わる講演会(フセマルプラットホーム・京都府・オンライン)
防災教育コーディネーターオンラインセミナー
(防災教育コーディネーター養成塾・新潟県・オンライン)
- ・2023/7/10 福祉教育実践発表会・研究会(岩沼市社会福祉協議会)
- ・2023/7/29 多世代交流サロン(白萩地区・仙台市若林区)
- ・2023/9/3 日本福祉教育・ボランティア学習学会拡大理事会(オンライン)
- ・2023/9/20 日本福祉教育・ボランティア学習学会ネットワーク委員会(オンライン)
- ・2023/11/4~5 日本福祉教育・ボランティア学習学会新潟大会
- ・2023/12/4 日本福祉教育・ボランティア学習学会ネットワーク委員会(オンライン)
- ・2024/2/25 防災料理教室(六郷地区赤十字奉仕団・仙台市若林区)

県内外の社会福祉協議会・団体等を訪問し、福祉・防災学習に関する活動状況や今後の展望、地域の状況等についてヒアリングを行いました。

- ・2023/6/8 大和町社会福祉協議会
- ・2023/6/19 石巻市社会福祉協議会
- ・2023/6/20 南三陸町社会福祉協議会
- ・2023/7/18 大崎市社会福祉協議会岩出山支所・田尻支所
- ・2023/7/19 ウェザーハート災害福祉事務所(山形県)
- ・2023/12/8 角田市社会福祉協議会、柴田町社会福祉協議会
- ・2023/12/25 大崎市社会福祉協議会本所・古川支所・田尻支所
- ・2024/1/11 南三陸町社会福祉協議会
- ・2024/1/19 ゆりあげかもめ(名取市)
- ・2024/1/31 柴田町社会福祉協議会
- ・2024/4/10 角田市社会福祉協議会、柴田町社会福祉協議会
- ・2024/4/11 美里町社会福祉協議会
- ・2024/4/12 大崎市社会福祉協議会
- ・2024/5/28 南三陸町社会福祉協議会

5. 普及啓発のための情報発信事業

宮城での実践を活かし、県外での研修会講師対応、メディア出演などに取り組みました。またホームページやSNSによる情報発信を行いました。

- ・2023/6/29 職員研修(大阪府和泉市社会福祉協議会)
- ・2023/10/5、19、20 地域における福祉学習実践事業(藤崎町社会福祉協議会・平内町社会福祉協議会・鶴田町社会福祉協議会※青森県社会福祉協議会指定事業)
- ・2023/10/14 防災・減災ワークショップ(内閣官房国土強靱化推進室)
- ・2023/12/12 市内福祉施設職員研修(沖縄県那覇市社会福祉協議会)
- ・2023/12/21 福祉活動専門員研修(愛媛県今治市社会福祉協議会)
- ・2024/3/1 役員・部会等委員合同研修会(青森県民生委員児童委員協議会)
- ・2024/3/23 ボランティア講座(大阪府大東市社会福祉協議会)
- ・2024/3/28 災害時クッキング(放課後等児童デイサービス scrumPLUS 沖縄宮里校・オンライン)

メディア出演

- ・2023/10/15 さくら FM 電話出演
- ・2023/10/24 ラジオ3収録

【成果と課題】

みやぎ発防災ゲームの活用をサポートする動画を作成したことで、ご購入いただいた団体の中で・また協力者を広げていくにあたって、実施イメージの共有がしやすくなったとの声をいただいています。ツールを生み出した後も、実践の状況をお聞きしながら、現状や課題に合わせたサポートを継続して行っていくことの重要性を感じました。

防災レシピカレンダーの製作は2年目に入りました。1年目の内容を踏まえて2024年版カレンダーのレシピはより洗練された内容となった、学生と地域と東日本大震災の教訓をつなぎ発信する良いツールと思うので継続して行ってほしい、と、ご購入いただいた皆さんから好評いただいています。オンラインや対面でカレンダー掲載レシピの料理教室も開催することができました。カレンダーを販売することが第一の目的ではなく、学習ツールを生み出していくこと・学習ツールの良い活用・震災の教訓をつなぎ発信し防災への関心の輪を広げていくことを意識し、今後の展開に反映させていきます。

また2023年度はこれまで関わらせていただいた地域をまわり、近況を伺いながら、当会に求められる取り組みについて考えました。

コロナ禍での変化としては、今年度からやっとコロナ禍前のような形態で事業を実施できるようになってきたという声が多く、食を伴う活動はまだ本格的に再開できていない等、体験学習の実施形態や内容にもまだ制約がみられます。また、集合型の事業を企画してもコロナ禍前ほど参加者が集まらず、企画に苦勞しているという声も聞かれました。住民間だけでなく、研修や会議のオンライン開催が一般的になったことで、関係者間のつながりも弱くなってしまったように感じる、という声も複数聞かれました。一方でコロナ禍の影響で事業形態を変更し、市域で取り組んでいたことが小地域単位での実施になり、住民の身近な所で実施できるようになり結果的によかった、といったプラスにはたらいた例もみられました。コロナ禍の影響はまだ多く見られますが、今後も状況に合わせた活動サポートを行っていきます。

2. 文化交流活動支援事業

2-1. スタディツアー

◆東北タイ・ノーンメック村ホームステイの旅

日時:8月3-7日 参加者7人(小学生、大学生、大学院生、社会人)、C4C 理事3人

コロナ禍によって4年間開催できなかったタイへのスタディツアーを開催することができました。今回の目的は、ホームステイを通じて村人と交流し、人々の暮らしと文化を体験することでした。朝は、仏教寺院での食事の布施から始まり、これまでノーンメック村の人々がコミュニティと子どもたちのために行ってきた様々な活動を見学し、田植えや草木染を体験してもらいました。

田植えは、適度な曇り空の下、互いに助け合う『結』の伝統を復興させ、周辺村の村人たちおよび有機農業研修に来たカンボジア人農民、地元大学看護学部の学生、他県から来た農民などと一緒にを行いました。

最後の夜は、村人たちが集まり、長寿や旅の安全を願って一人一人の手首に白い木綿の糸を巻いてくれ、参加者の胸を熱くしました。年齢や居住地、そして参加動機もそれぞれ異なる参加者でしたが、新しい出会いと体験を得たようです。また村人たちも久しぶりのホームステイの受け入れを喜んでくれ、これからの交流に期待していました。



◆カンボジア・チュロイスナオ村コミュニティ図書館視察ツアー

日時:2月16-20日 参加者2人(社会人、大学生)、C4C 理事3人

2022年度寄付を募り、2023年5月に完成したチュロイスナオ村のコミュニティ図書館の公式な開所式に参加するためにスタディツアー参加者を募りましたが、最低催行人数に達しませんでした。しかし開所式に参加する視察ツアーとしてC4C 理事とともに、希望者二人が開所式に参加し、多くの村人や子どもたちから歓迎を受けました。同行した日本人参加者が紙芝居、読み聞かせ、折り紙などを見せると、子どもたちは元気に歌やダンスを見せてくれ、一緒に伝統的な遊びをしました。また日本のお菓子(白玉)作りにも挑戦し、交流を楽しみました。また寄贈していただいた日本の中古絵本を何人かの日本人学生でクメール語翻訳したものを40冊ほど図書館に寄付しました。



コミュニティ図書館は、毎日多くの子どもたちが読書や話し合いのために利用し、運営も村人が教師と協力して担っています。今回、図書館が欲しいと言う子どもたちの夢を実現させるために、コミュニティの大人たちが動いた結果、コミュニティ図書館を建設する寄付を集め、無事完成させることができました。完成した後も学校の階段の再設置や校庭の整備など、子どもたちが安全に勉強できるように活動を続けています。今回訪問したことで、村人たちの子どもたちの将来に対する期待を強く感じました。

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3-1. 研修事業

◆カンボジア人のタイにおける有機農業研修

日時:8月5-10日 @タイ・ノーンメック村、その他 参加者カンボジア人7人(農民3人スタッフ4人)
カンボジア人7人がタイを訪れ、草木染を中心に有機農業・環境教育研修に参加しました。参加したのは、カンボジアの連携団体であるKCDのスタッフと農民で、それぞれが青少年育成事業に関わっています。

コロナ禍の4年間、オンラインでタイとカンボジアのスタッフ間交流を続けてきましたが、今回久しぶりの対面交流で戸惑いながらも、有機農業実践者の農場などを訪問し、草木染を始め、農場の経営、協働体制、商品化、市場などについて視察し経験をシェアしました。

カンボジアの有機農業の課題は、市場です。それは加工・商品化と深く関連しています。タイでも有機農業生産物の市場開発は、最近盛んになってきたばかりです。お互いに学ぶことは多いと考え、タイとカンボジアの農民交流を続けています。

※本事業は、公益財団法人大阪コミュニティ財団から『カンボジア農村における草木染を通じた環境教育と青少年育成事業』として助成金を受けて実施しました。



3-2. 国内IDoCafé(あい・どう・かふえ)事業

◆IDoCafé Vol.18.～子どもたちの「学びたい！」をかなえる！カンボジア・チュロイスナオ村コミュニティ図書館建設プロジェクト完成報告会～

日時:7月30日 @オンライン 参加者15人

2022年11月から2023年2月まで、日本とカンボジアで集めた寄付で建設したチュロイスナオ村コミュニティ図書館の完成報告をカンボジアとZoomでつないで行いました。日本からは主に寄付者が参加し、完成を確認しました。チュロイスナオ村からは住民1人と子ども会メンバー4人が参加し、現在の利用状況やこれからの図書館の運営などについて話をしてくれました。

住民のナロンさんは「このようなプロジェクトは村でも初めての取り組みで不安だったけれど、成功したこと、みんなが協力してくれたことがうれしい。日本のみなさん、ありがとう。」と気持ちを語ってくれました。そして最後に「これからも子どもたちのためにやれることはいっぱいある。これからもいろいろな人と協力していきたい」とのメッセージを送ってくれました。

◆IDoCafé Vol.19.「美味しく」「楽しく」作ろう！～普段の料理にも活かせる防災レシピ・クッキング～

日時:11月25日 @滋賀県立長寿社会福祉センター調理室 参加者17人

社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会の協力を得て、防災レシピ・クッキングを行いました。家族や友人同士での参加もあり、暖かい雰囲気の中行われました。インストラクターとして宮城学院女子大学ボランティアサークルFood and Smile!(FAS)で活動する学生2人来てもらい、日本・宮城県の現地団体HumanBeingが制作した「防災レシピカレンダー2024」に掲載されたレシピ2品を一緒に作りました。どちらもポリ袋を使った簡単な調理方法でできるため、小さな子どもにも作ることができました。調理の



後は、みんなで実食し、交流の時間を楽しみました。

今回は、久しぶりに実施した対面での IDoCafe であり、やはり直接会って話す機会を持つことの大切さを再確認しました。

4. パートナースhip推進事業

4-1. 調査事業

(1)宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査

調査実施者:Human Being 菅原清香会員

宮城県および周辺県等において、国内事業「福祉・防災学習推進事業」の実施主体を訪問し、ヒヤリング調査、研究、事業実施に関する意見交換を行いました。C4C の各事業と当事業との調整も行いました。

5. 情報提供事業

5-1. ホームページ、ブログ、Facebook による情報発信

C4C だより vol.8 と vol.9 の 2 回発行を行いました。各国を訪問した際の様子や活動の進捗状況など、紙面を通して詳細をお伝えしました。

5-2. イベント参加

◆ワンワールドフェスティバル for Youth

日時:12 月 17 日 @大阪 YMCA

高校生のための多文化共生・国際協力のイベントで C4C も活動紹介ブースを出しました。入場者は要予約であり、人数制限していたためか、それほど多くの人々が集まった感はありませんでした。

◆ワンワールドフェスティバル

日時:2 月 3-4 日 10:00-17:00@梅田スカイビル ステラホール

新しい場所に移転して開催することになり、C4C も活動紹介ブースを出しました。国内外の観光客が集まる界隈であることから、多くの人が集まりましたが、活動への関心はそれほど感じませんでした。今後、参加を再考すべきかもしれません。

5-3. 教育機関での広報活動

◆日時:7 月 15 日 9:00-11:30@育英西中学校

ワンフェス for Youth で出会った中学生に呼ばれ、自由研究のアイデアを提供するために中学校を訪問しました。C4C のビジョンと活動、およびカンボジアにおける具体的な活動について、加藤副代表が、中学 2 年生 5 人に対して説明しました。

◆日時:4 月 30 日 14:25-15:15 @大阪府立高石高校

外部講師を呼んで行うリレー講義の一環に、栗原代表理事が呼ばれ、宮城事業で実施している「こどもや若者と取り組む災害にも強い福祉のまちづくり」の取り組みを紹介しました。

6. 組織運営

◆2023 年度会員について

2023 年度会員・寄付者

人数の変動

		2021 年度	2022 年度	2023 年度
正会員数	個人	13	14	10
	団体	0	0	0
賛助会員数	個人	20	20	24
	団体	0	0	0
使途指定寄付	指定寄付(宮城防災)	0	0	0
	フィリピン・奨学金	0	1	1
	タイ・ノーンメック村	1	1	1
	カンボジア・コミュニティ図書館建設	—	44	—
	カンボジア事業寄付			2
一般寄付		9	7	3

2023 年度からスタディツアーを再開したため、賛助会員数は増えました。しかし全体的に会員・寄付者数は減っています。会員・寄付者の高齢化ならびに C4C からの広報などが不足していると考えられます。

2023年度 本来事業の会計 財産目録
2024年5月31日現在

(円)

科 目	摘 要	金 額		
資産の部				
流動資産				
現金		49,098		
普通預金		66,866		
--三井住友銀行		48,165		
--ゆうちょ銀行総合口座		18,701		
未収金		1,249		
前払金		250,508		
流動資産合計			367,721	
固定資産				
什器備品		79,978		
固定資産合計			79,978	
資産合計				447,699
負債の部				
流動負債				
未払金		559,502		
預り金		6,247		
流動負債合計			565,749	
固定負債				
固定負債合計			0	
負債合計				565,749
正味財産合計				-118,050

2023年度 貸借対照表 (2024年5月31日現在)
本来事業の会計

(円)

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
現金	49,098	未払金	559,502
普通預金	66,866	預り金	6,247
未収金	1,249	流動負債合計	565,749
前払金	250,508	固定負債	
流動資産合計	367,721	固定負債合計	0
固定資産		負債合計	565,749
什器備品	79,978	正味財産の部	
固定資産合計	79,978	前期繰越正味財産	9,083
		当期正味財産増減額	-127,133
		正味財産合計	-118,050
資産合計	447,699	負債及び正味財産合計	447,699

2023年度 損益計算書（前年度対比） 2023年06月01日～2024年05月31日 一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 本来事業の会計			
(収入の部)			(円)
科目	2022年度 決算額	2023年度 決算額	増減額
1. 会費収入			
正会員受取会費	140,000	100,000	-40,000
賛助会員受取会費	110,000	120,000	10,000
2. 寄付金			
一般寄付	13,547,000	15,679,928	2,132,928
フィリピンのしょうがい児者応援寄付	12,705	30,000	17,295
タイ・コミュニティ支援寄付	5,000	5,000	0
カンボジア・コミュニティ図書館建設指定寄付	516,100	0	-516,100
カンボジア事業寄付	0	50,000	50,000
3. 事業収入			
タイ・スタディツアー参加費	0	150,000	150,000
国内IDoCafe事業参加費	0	5,000	5,000
4. 民間助成金			
大阪コミュニティ財団	0	540,000	540,000
5. 雑収益			
受取利息	32	38	6
当期収入合計（A）	14,330,837	16,679,966	2,349,129

(支出の部)			
事業費			
科目	2022年度 決算額	2023年度 決算額	増減額
■ NGO支援事業			
海外支援事業費			
フィリピン・JPCOM-CARES支援	3,474,151	4,595,068	1,120,917
タイ農村コミュニティ支援	2,255,802	2,165,099	-90,703
調整にかかる海外渡航費等	518,390	1,796,812	1,278,422
事業助成事業費			
海外渡航費プロジェクト助成(カンボジアKCD)	2,866,390	2,205,777	-660,613
調整にかかる海外渡航費等	20,719	522,038	501,319
日本支援事業			
宮城県における福祉・防災普及推進事業	1,133,731	682,551	-451,180
■ NGO支援事業計	10,269,183	11,967,345	1,698,162
■ 文化活動支援事業			
タイ・スタディツアー事業費	0	146,420	146,420
カンボジア・コミュニティ図書館建設事業	500,300	3,100	-497,200
■ 文化活動支援事業計	500,300	149,520	-350,780
■ 視察・研修・ワークショップ			
国内IDoCafe事業費	0	148,123	148,123
招聘視察・研修事業費	0	45,000	45,000
カンボジア人有機農業研修事業費	0	811,143	811,143
■ 視察・研修・ワークショップ計	0	1,004,266	1,004,266
■ パートナーシップ推進事業			
調査事業費	2,400,000	2,400,000	0
■ パートナーシップ推進事業計	2,400,000	2,400,000	0
■ 情報提供事業			
情報提供事業費	53,317	51,230	-2,187
■ 情報提供事業計	53,317	51,230	-2,187
事業費支出計	13,222,800	15,572,361	2,349,561

科目	2022年度 決算額	2023年度 決算額	増減額
管理費			
給料手当	557,600	544,000	-13,600
旅費交通費	32,800	30,020	-2,780
諸謝金	120,000	120,000	0
会議費	24,510	29,310	4,800
通信運搬費	55,646	52,806	-2,840
消耗品費	104,957	27,627	-77,330
印刷製本費	87,246	56,155	-31,091
保険料	65,380	65,380	0
支払地代家賃	120,000	120,000	0
諸会費	25,000	25,000	0
支払手数料	22,000	22,262	262
租税公課	2,200	12,200	10,000
減価償却費	159,955	79,978	-79,977
法人税、住民税及び事業税	50,000	50,000	0
管理費計	1,427,294	1,234,738	-192,556
当期支出費用合計 (B)	14,650,094	16,807,099	2,157,005
当期収支差額 (A) - (B)	- 319,257	-127,133	
前期繰越金 (C)	328,340	9,083	
次期繰越金 (A) - (B) + (C)	9,083	-118,050	



2024 年度(2024 年 6 月 1 日～2025 年 5 月 31 日)事業計画書

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

フィリピン国 JPCoM-CARES への支援とタイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業を継続します。各地の現地の団体や個人が主体的に助成金等の多様な財源を獲得できるよう、C4C からもアドバイスをを行います。

A. JPCoM-CARES(フィリピン共和国バギオ市と周辺町村、ベンゲット州カバヤン町)

昨年度から再編成が始まったばかりのカバヤン町の保護者同士の繋がりや主体的な運営が育まれていくよう、保護者会の基盤づくりをサポートしていきます。また、保護者のニーズや声を丁寧に聞きとりながら、子どもたちが笑顔で育つことができる地域づくりに向けた活動をともに考え、取り組んでいきたいと考えています。

また、子どもたちがそれぞれの地域で安心して暮らし、地域社会への参加がすすんでいくよう、子どもたちや保護者の暮らしの様子についてアセスメントを行っていきます。そこから見えてきた状況や情報をもとに、地域へのアウトリーチや地域をベースとした活動を再考し、取り組んでいきます。

B. タイ・ノーンメック村コミュニティ支援(タイ王国コンケン県)

これまでノーンメック村を中心に様々なコミュニティ支援活動を行ってきましたが、コロナ禍を経て徐々に活動拠点がアレンヤー実験農場に移され、これまでノーンメック村内で実施してきた活動のほとんどが農場で行われています。農場の地所の一部に月例マーケットを設営し、農業経営や有機農業技術を学ぶワークショップも同時に行いながら、マーケットを通じて、より広いネットワークづくりを目指すとともに、年に一回移動式マーケット(旅する市場)として、別の場所に移動しながら新しいネットワークづくりに励みます。

今後、これまで農村で行ってきた子どもとコミュニティを支えるための事業を、地元の若者たちに継承していくために、青少年育成に力を入れます。特に都市で様々な経験をしたのちに帰村した青年たちとともに新しい形を模索しながら、子どもが笑顔で暮らせるよう見守りを支援し、育った子どもたちが何かを還元してくれるコミュニティ作りを目指します。それは物理的な村落を意味するだけでなく、インターネットを含めた広い人脈と知識の蓄積を含むコミュニティであり、多方面で子どもたちを支えるコミュニティです。どのようなコミュニティが子どもたちや地域にとっていいのか、健康に直結する食の安全や環境保護を考慮に入れながら模索していきます。そして将来、村の若者たちが自分たちの地域やコミュニティ作りを担うことができるようにサポートしていきます。

C. 海外プロジェクト助成(短期の事業単位での助成)

Khmer Community Development(KCD)－カンボジア国カンダール州プレックチュレイ村とその周辺村において、子ども会活動の支援を継続して行います。また子ども会のネットワークづくりも側面支援します。その他、カンボジア人がタイで学ぶ有機農業研修も継続して行います。

1-2. 国内支援事業

A. 宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の福祉力・防災力を高めるとともに、普

段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』このことを実現するために、宮城県内で取り組まれる「災害にもつよい地域づくり」を目指す児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、地元の社会福祉協議会・NPO・学校等と連携・協働し取り組んでいきます。

特に 2024 年度においては、これまでの取り組みや昨年度のヒアリング内容から、福祉・防災学習の推進に取り組む方々の情報交換と担い手育成、そしてこれまでに作成してきた防災学習ツールの発展を目的とした情報交換会を対面およびオンライン形式にて行います。

また東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの普及・啓発活動、防災レシピカレンダー製作を通じた担い手育成、県内を中心とした福祉・防災学習実践支援などを通して、東日本大震災から 10 年以上が経過した宮城における東日本大震災の教訓の伝承や、福祉・防災学習推進の担い手育成に引き続き取り組んでいきます。

B.国内プロジェクト助成

日本国内で子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、支援要請があった場合に、別に定める助成要項に沿ってその都度検討します。

2. 文化交流活動支援事業

2-1. スタディツアー

A. タイ・スタディツアーの実施

8 月にタイ・ノーンメック村でホームステイを実施する予定です。

B. フィリピン・スタディツアーの実施

今年度は実施の予定はありません。

C. カンボジア・スタディツアーの実施

2025 年 2 月頃の実施を検討しています。

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3-1. 視察・研修事業

理事、社員、寄付者、専門家を中心とした現地視察、連携団体に所属するスタッフ、利用者への研修、および連携団体間の交流を実施します。

- ・ 日本、タイ、フィリピンをはじめラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、C4C と関連する活動を行う団体、個人との相互交流を図ります。
- ・ 日本国内での現地報告会、講座や演習の開催、講師派遣
- ・ 子どもを中心とした地域づくり推進を目的とした講座や演習の実施、もしくは講師およびアドバイザーの派遣

3-2. 国内 IDoCafe 事業(年 2 回開催予定)

IDoCafe は、何らかの想いを形にし、社会に貢献しようとする人々が、ディスカッションを通じて新しいつながりを生み出す場です。国内での情報発信のために、オンラインと対面の両方で開催を計画します。

4. パートナーシップ推進事業

4-1. 調査事業

- ・ 日本、タイ、フィリピンをはじめ、ラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、パートナーづくりを進めます。
- ・ 昨年度に引き続き、アジアや日本で活動する団体へ調査員を派遣すると同時に、これまで出会った団体との交流を深め、現場の状況やニーズから支援のやり方やあり方の相互理解を進めます。
- ・ 宮城県における福祉・防災学習推進事業を推進するための調査研究・調整を年間委託して行います。

4-2. ホームページやブログなどを通じて、C4C の取り組みを発信しパートナーづくりを進めます。

5. 情報提供事業

5-1. ホームページ、ブログによる情報発信

ホームページや Facebook、C4C だよりの発行や活動ブログの更新を通して、C4C の取り組みを発信していきます。

5-2. イベント参加

ワンワールドフェスティバル等、国際協力や地域づくりに関連する様々なイベントに参加し、C4C の活動を紹介します。

5-3. 支援キャンペーン

支援団体や支援事業への寄付や参加を呼びかけるキャンペーンを実施します。

5-4. 現地提携団体への情報提供

世界の動向をはじめ、活動をサポートする情報を提供します。

6. その他

上記の他、C4C の目的を達成するために必要な事業を実施していきます。

2024年度 一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン事業収支予算書 2024年6月1日～2025年5月31日		
	金 額 (円)	備考
(収入の部)		
1. 会費収入		
正会員会費	300,000	
賛助会員会費	300,000	
2. 寄付金収入	17,000,000	
3. 事業収入	200,000	
4. 民間助成金	700,000	
当期収入合計 (A)	18,500,000	
(支出の部)		
1. 事業費		
■NGO支援事業		
海外支援事業費	(JICA精算レート2024 年7月に準ずる)	
タイ・農村コミュニティ支援	3,035,385	696,600/パーツ
フィリピン・JPCOM-CARES支援	5,686,652	2,078,416.70/ペソ
調整にかかる海外渡航費等	800,000	
事業助成事業費		
海外プロジェクト助成	2,890,458	カンボジアKCD支援\$18,000
調整にかかる海外渡航費等	300,000	
日本支援事業費		
宮城県における福祉・防災学習推進事業	810,000	
■文化交流活動支援事業		
フィリピンスタディツアー事業費	0	
タイスタディツアー事業費	200,000	
国際交流事業費	0	
■視察・研修・ワークショップ		
国内IDocafe事業費	100,000	
招聘視察・研修事業費	700,000	カンボジア人のタイでの研修
■パートナーシップ推進事業		
調査事業費	2,500,000	調査研究業務委託費240万円（宮城県）含む
■情報提供事業		
情報提供事業費	60,000	HP管理、イベント参加料等
事業費計	17,082,495	
2. 管理費		
給料手当	600,000	事務パート1名
旅費交通費	50,000	
諸謝金	120,000	事務補助1名
会議費	20,000	
通信運搬費	50,000	
消耗品費	90,000	
印刷製本	50,000	
保険料	65,000	
支払地代家賃	120,000	
諸会費	25,000	
支払手数料	20,000	
租税公課	10,000	
法人税、住民税及び事業税	70,000	
管理費計	1,290,000	
当期支出合計 (B)	18,372,495	
当期収支差額 (A) - (B)	127,505	
前期繰越金 (C)	-118,050	
次期繰越金 (A) - (B) + (C)	9,455	

